



TITLE:

<書評>田中雅一編『軍隊の文化人類学』 風響社、2015年、5,000円
＋税、604頁

AUTHOR(S):

北村, 毅

CITATION:

北村, 毅. <書評>田中雅一編『軍隊の文化人類学』 風響社、2015年、
5,000円＋税、604頁. コンタクト・ゾーン 2016, 8(2015): 123-129

ISSUE DATE:

2016-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/217884>

RIGHT:

田中雅一編 『軍隊の文化人類学』

風響社、2015年、5,000円＋税、604頁

北村毅

本書は、軍隊について文化人類学的視点から考察を試みた論文集である。その最大の意義は、他の研究分野においてこれまで抽象的かつ総体的に組織論へと収斂させて論じられがちだった軍隊という問題に対して、論者それぞれのフィールドに即して文化的なアプローチで研究が試みられた点にあるといえるだろう。

本書は、2003年度から編者の田中雅一を中心に開始された「アジアの軍隊プロジェクト」と称する三つの共同研究の成果の一部として刊行された。国内外から15人が寄稿しているが、それぞれの議論の対象となった軍隊は、自衛隊と戦前の帝国日本軍を中心に、韓国、中国、アメリカ合衆国、英国、フィリピンなど多岐にわたる。時代的にも、近代軍隊の成立期から第二次世界大戦、冷戦期を経て、2011年の「トモダチ作戦」（説明後述）以後まで幅広い。スキップブランド論文（第6章）や朴論文（第11章）のように、インタビューや参与観察にもとづく精緻な研究だけではなく、高嶋論文（第10章）のように、比較文化史研究として読み応えのある論考も収められたことで、モダニズムやコロニアリズムとの絡まりの中で軍隊について考える足場を築くことに成功している。

田中が序章で述べているように、本書で軍隊が文化人類学の研究対象として選ばれたことは、ポストモダン以降の人類学の趨勢と密接に関わっている。文化人類学の研究対象は、長い間、地理的に周縁化された存在が中心であったが、近年では性的マイノリティなどの「他者＝弱者」へと拡張しつつある。いずれにせよ、コロニアルなまなざしが向けられた先に生起する非対称的な権力関係は否めない。

田中は、そのような「表象をめぐる呪縛から逃れる」ために、「他者ではあるが、弱者ではない、また弱者とは捉えにくい存在」を研究対象とすることの有効性を強調している。本書の主題となる軍隊は、そのひとつの方法として位置づけられ、「国家暴力装置」としての、すなわち、その強者としての一面ゆえに、他者表象の暴力から自由になりたい「人類学者が挑戦すべき対象」として選び取られたのである。

もちろん、田中が序章で指摘しているように、「軍隊を構成する多くの兵士は社会において周縁的存在」である場合が多く、集団としての強者性と個人としての弱者性を区別す

る必要がある。さらに、社会の底辺からリクルートされた兵士が、軍隊内や戦場で強者・抑圧者・加害者になるという転倒については、軍隊組織の問題として理解するだけでは充分ではなく、より大きく社会構造的な問題として捉えることが重要になってくるだろう。こうした強者でもあり、弱者でもある「他者」の二面性を捉えてこそ、多様な文化集団を扱ってきた文化人類学がこの新たな研究テーマに取り組む意義が明確になるはずである。

それでは、上記の田中が提起した論点を踏まえつつ、それぞれの論者が実際にどのような議論を展開しているのか、軍隊をフィールドとして研究することにいかなる可能性を見出すことができるのか、見ていきたい。

本書の構成は、以下の通りである。

序 章 軍隊の文化人類学のために（田中雅一）

第Ⅰ部 軍隊とジェンダー・家族

第1章 モダン・ガール（モガ）としての女性兵士たち——自衛隊のうちとそと（サビーネ・フリーシュトゥック／萩原卓也訳）

第2章 逡巡するも、続ける——軍事組織における女性のキャリア形成とライフ・イベント（福浦厚子）

第3章 自衛隊と家族支援——地域支援力の構築にむけて（河野 仁）

第Ⅱ部 軍隊と地域社会

第4章 占領という名の異文化接合——戦後沖縄における米軍の文化政策と琉米文化会館の活動（森田真也）

第5章 軍隊・性暴力・売春——復帰前後の沖縄を中心に（田中雅一）

第6章 「愛される自衛隊」になるために——戦後日本社会への受容に向けて（アーロン・スキヤブランド／田中雅一・康陽球訳）

第7章 アフリカ系アメリカ人の社会運動にみる軍事的性格——暴力、男らしさ、黒人性（小池郁子）

第Ⅲ部 軍隊と国家

第8章 殉職と神社——日本の軍隊および警察における殉職者の慰霊をめぐる（丸山泰明）

第9章 日本の自衛隊に見る普通化、社会、政治（エヤル・ベン＝アリ／神谷万丈訳）

第10章 軍隊と社会のはざままで——日本・朝鮮・中国・フィリピンの学校における軍事訓練（高嶋 航）

第11章 韓国社会の徴兵拒否運動からみる平和運動の現状（朴 眞煥）

第12章 グルカ兵はどのようにして英国市民になったのか？——移民退役軍人による多層的な自己包摂の試みと市民権の再構築（上杉妙子）

第Ⅳ部 軍隊の表象のポリティクス

第13章 日本における軍隊、戦争展示の変遷（福西加代子）

第14章 豪従軍カメラマンの描いた日本兵像とその変化——デミアン・ペアラーの

ニューギニア戦線ニュース映画をとおして (田村恵子)

第15章 「トモダチ作戦」のオモテとウラ——在日米軍による東日本大震災の災害救助をめぐるポリティクス (クリストファー・エイムズ)

序章にて、田中は、軍隊に対して文化人類学的にアプローチするための視座として、(1) ジェンダーと家族、(2) 地域社会との関係、(3) 国家との関係、(4) 軍隊の表象の4つを挙げているが、これらはそれぞれ第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部、第Ⅳ部の構成に対応している。各章の執筆陣には、文化人類学を専門とする研究者だけではなく、民俗学、歴史学、社会学などの隣接領域の研究者も加わって厚みのある論が展開されているが、以下では、できる限り、個別の論文に言及しつつ、セクションごとに議論を追っていくことにする。

第Ⅰ部「軍隊とジェンダー・家族」では、自衛隊を事例に、軍隊におけるジェンダーや家族の問題が主たるテーマとして取り上げられている。

第1章のフリーシュトゥック論文と第2章の福浦論文は、軍隊という男性中心社会の中のマイノリティである女性自衛官に焦点を当てて、彼女たちが軍事組織の中で周縁化されながらキャリア形成を図ることの困難について検証している。フリーシュトゥック論文は、女性自衛官の語りを事例として提示することで、自衛隊内の女性が直面している困難が、単に軍隊組織固有の問題というよりも、日本という家父長社会が抱える問題の縮図であることを示唆した。一方、福浦論文は、5人の女性自衛官の生活誌を通して、父権イデオロギーとの衝突や交渉を生活レベルで具体的に描き出している。

フリーシュトゥック論文では、第Ⅳ部の主題でもある軍隊と表象の問題についても扱われており、自衛隊の広報媒体において、女性の身体、とりわけ成人女性ではなく少女のイメージが濫用されているとの指摘は重要である。大日本帝国海軍の軍艦が少女のキャラクターに擬人化された「艦娘」を収集するゲーム「艦隊これくしょん」など、「萌え系」少女の身体の軍事化は2010年代に入って新たな展開を見せつつあるが、このことはフリーシュトゥックが指摘する日本のナショナルな表象自体が女性化・幼児化されていることとどのように関係しているのか、考えさせられた。

福浦論文によれば、女性自衛官の45%が既婚で、その内の約8割が配偶者も自衛官であるとのことだが、女性自衛官は自衛官としての任務に加えて、「夫のキャリアを支える妻」という家庭内での役割も背負わされているという。フリーシュトゥックが言及している通り、女性自衛官が職場結婚によって「社会関係資本」を奪われがちであるとの指摘も重要である。この女性自衛官の現実、第3章の河野論文が扱う自衛隊員の留守家族支援の問題ともリンクしているはずである。自衛官の家族が自衛官である場合も少なくないはずだが、支援の対象となる「家族」の内実が知りたくなった。

第Ⅱ部「軍隊と地域社会」では、沖縄や北海道などの特定の地域に展開する軍隊を事例に、地域住民の葛藤や文化接触の問題が主たるテーマとして取り上げられている。

第4章の森田論文は、琉球列島米国民政府が社会教育施設として1951年と1952年に設置した琉米文化会館を軸に、米軍統治下の沖縄における文化政策を検証し、同会館が「ア

アメリカ的な文化と沖縄の地域住民の生活世界」の「コンタクト・ゾーン」であり、「一種の異文化接合の場であった」と論じている。本稿が琉米文化会館という場で展開されていた米軍統治下の文化政策の全体像を丹念に描き出したことの意義は大きい。一方で、森田が述べている通り、それが「政治的な権力関係を内在した極めて不均衡な接合であった」ことを鑑みれば、「軍隊と社会の相互規定的な関係」を逸脱するような事例もまた気になってくる。戦後の沖縄において、軍隊と地域社会が直接的・間接的に接触する「コンタクト・ゾーン」は、同会館のような公的領域以外にも様々に認められるだろう。

第5章の田中論文は、主に雑誌記事を資料として、米軍統治下の沖縄における性暴力と売春について論じている。本稿では、東峰夫の『オキナワの少年』を彷彿とさせるような米兵相手の売春の報告記事が検証されるが、沖縄の売春に関する言説を通して、占領期の「本土」の売春と必ずしも同列に扱えない実態を明らかにした。また、そのような「沖縄報告」の数々が「本土」の男性メディアのまなざしを介在していたとの指摘が重要である。同じように、「ひめゆりの乙女たち」のイメージもまた「本土」に消費された歴史があるが、いずれにせよ沖縄は女性化されて表象されるのが常であった。その裏面に、第10章の高嶋論文でも言及されている「コロニアル・マスキュリニティ（植民地的男性性）」の問題が伏在していることが、田中の論考からも読み取れるだろう。

第6章のスキヤブランド論文では、北海道に展開する自衛隊の北部方面隊を対象として、1950年代から1970年代初頭までの期間を中心に自衛隊が地域社会で展開した広報活動と対内的な戦略が考察されている。戦前の日本軍さながらに、広報を「戦術行動の一つであり、心理戦の理論技術が適用される」と位置づけていた自衛隊は、「愛される自衛隊」になるために、機関誌や写真集の刊行、音楽隊の活動、一日入隊体験、パレードや防衛博覧会、雪まつりのようなイベントを通して地域社会に浸透していった。一方で対内的には、隊員たちを「昭和の屯田兵」として訓育し、「土着化」と呼ばれた地元女性との結婚を奨励したのである。北部方面隊の一駐屯地に生まれ育った評者は、記憶の中の自衛隊のプレゼンスを思い起こしながら読んだが、その背景を知ることができて個人的に大変興味深かった。

第Ⅲ部「軍隊と国家」では、東アジアの事例を中心に、国家と軍隊ならびにそれに類似する集団との関係、そして、軍事主義や軍事文化に対抗する市民運動などが主たるテーマとして取り上げられている。

第8章の丸山論文は、戦前日本の軍隊や警察、戦後の護国神社を事例として、平時における殉職者の慰霊について考察している。歴史学、民俗学、宗教学などの分野において、これまで数多くの戦死者の慰霊・顕彰に関する研究が積み重ねられてきたことに比べて、殉職者の研究は圧倒的に手薄である。丸山は、神として祀られた殉職者の事例の検討を通して、そのような習慣が日本人一般の普遍的な心性に還元されるようなものではなく、個々の事情や時代状況の中で場当たりに選び取られてきたものであることを明らかにした。丸山は、最後に「21世紀は戦死より殉職が死者慰霊の中心となる世紀」と記しているが、このことは平時の真っ直中に戦場が現出することを示唆している。

第9章のベン＝アリ論文は、「普通化（normalization）」という言葉を中心に、戦後日本の

安全保障政策と自衛隊に関する議論の変化について考察している。日本の安全保障政策の方向性が述べられる際に「普通の国」という言葉が多用されてきたが、ベン＝アリは、そのことが自衛隊という軍隊の「普通化」への志向性と連動していることを示した。第6章のスキヤブランド論文が自衛隊の地域社会での「受容化＝普通化」について扱ったものであるならば、ベン＝アリ論文はより大局的かつ俯瞰的に自衛隊がグローバル・スタンダードに沿った「普通の軍隊」を志向する政治力学について論じている。自衛隊の「普通化」は「国民化」とも言い換えられようが、このような「国民化」が完遂されつつあるのは、本稿が論じている安全保障上の環境の変化以上に、大規模災害における自衛隊の救援・復興活動の影響が大きいのかもしれない。これについては、本稿が扱い切れていない部分を第7章や第15章の議論が補っている。

第10章の高嶋論文は、日本、朝鮮、中国、フィリピンの学校における軍事教育の比較を通して、ジェンダーやナショナリティに関わる特性に着目しながら、東アジアの近代化・国民国家化における軍隊と社会の特徴について考察している。19世紀末に日本の学校教育で採用された兵式体操は中国や朝鮮でも導入され、各国・地域の軍事化や軍民関係に多大な影響を与えた。本稿は、近代化・国民国家化と密接に絡み合いながら、学校における軍事訓練が国民皆兵や徴兵制の理念を下支えし、それぞれの社会を軍事化していく過程を辿るが、その緻密な議論に学ぶところは非常に大きい。とりわけ、軍事化とジェンダー化が対になっているとの指摘が重要である。それにしても、東アジアにおいて、戦後の冷戦体制のもとで日本が脱軍事化した一方で、他の国々の軍事化が急進し、冷戦体制崩壊を経て、近年では中国の軍事的台頭に直面しつつ伸展する日本の軍事化をどう捉えるべきか。本稿が立ち返らせてくれた通り、大日本帝国の「軍事化されたモダニティ」が源流に遡っていることは間違いなく、その逆流という現実と向き合うためにも、本稿の通文化的な歴史研究の重要性が際立つ。

第11章の朴論文は、韓国の徴兵拒否運動と平和運動を事例として、1990年代後半から2010年頃までの市民社会における変化に注目しつつ、当該社会の徴兵拒否運動の歴史と理念について考察している。最初に韓国社会における徴兵制と軍事文化の歴史が概観され、前章の議論と同様に、徴兵制を通じた軍事化がジェンダー化であり、国民化である当該社会の現実が論じられる。その上で、韓国の学生運動、平和運動、徴兵拒否運動などの関係者のインタビュー事例を通して、軍隊という国家権力、人びとの日常生活、市民社会といった領域がいかに関連し合っているのかを描き出した。朴自身が研究対象となった徴兵拒否運動団体の非常勤活動家であることもあり、具体的かつ実践的に軍事主義や軍事文化に対抗する市民社会の新たな価値を模索する動きにアプローチしている点に、軍隊研究における文化人類学の可能性を感じた。

第IV部「軍隊の表象のポリティクス」では、日本における戦争展示の変遷、2011年の「トモダチ作戦」に伴うイメージ戦略などを事例に、軍隊と社会が関わる領域での表象の問題が取り上げられている。

第13章の福西論文では、1930年代の日本で開催された軍隊や戦争に関する博覧会、ならびに、戦後の「平和博物館」と戦争展示を事例として、日本における戦争、軍隊、平和

の表象の変遷について考察している。具体的には、まず、戦前の戦争・軍隊展示の具体例として、支那事变聖戦博覧会（1938年）と大東亜建設博覧会（1939年）の内容が検討され、これらの効果を「戦場」の仮想体験であると論じた。ついで、戦後の「平和」と「戦争」展示の具体例として、立命館大学国際平和ミュージアムと呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）の内容が検討され、「戦争」展示と「平和」展示の接点の分析が試みられている。戦前の博覧会の戦争・軍隊展示と比較する対象であるが、今後、自衛隊の防衛博覧会などの事例にも広げて、さらなる研究展開を期待したい。

第15章のエイズ論文では、2011年の東日本大震災における在日米軍の災害救援活動（通称「トモダチ作戦」）を取り上げて、日本「本土」や沖縄における米軍に対するイメージの変化について考察している。救助活動を通して在日米軍に対する日本国民のイメージを向上させることができれば日米同盟の強化につながるとの日米両政府の思惑通りに進んだ「トモダチ作戦」のオモテとウラについて、本稿は政治的・文化的な側面から検証している。エイズは、ロバート・D・エルドリッジの見解を引用するかたちで、在日米軍と自衛隊が災害援助で連携を深めていくことの意義を確認しているが、そのような期待は裏面の両者の軍事面での連携強化と一対であることもまた、安全保障関連法案の成立、武器輸出三原則の緩和などの一連のショック・ドクトリン的な政策で露呈しつつある。また、「アレルギー」と表現される沖縄の人びとの米軍に対する拒否感、在日米軍関係者が構想するように、災害便乗的に解消されるような問題ではないように思われる。

以上、紙幅の都合もあり、すべての論文について触れられなかったのが心残りであるが、最後に全体を通した感想を述べたい。

本書は、軍隊に関わる文化の諸相を扱っており、まさしく「軍隊の文化」「軍隊と社会」研究の最前線といえるものである。本書を端緒に、今後、軍事文化の横断的比較、軍隊のプレゼンスがもたらす文化接触や文化変容、個々の兵士の生活史・誌など、様々な位相にアプローチした研究を積み重ねていくことで、軍隊の文化人類学的研究の可能性が突き詰められていくことになるだろう。

ただ惜しまれるのは、自衛隊を研究対象とした論考が多数収録されている（第1章、第2章、第3章、第6章、第9章）にも関わらず、いずれの研究においても、自衛隊と旧軍との間の連続性、軍事組織としての閉鎖性ならびに暴力性について論及されていない点である。すなわち、田中が序章で触れている「国家暴力装置」としての軍隊の側面について踏み込んだ考察を読みたいと思った。自衛隊が「普通の軍隊」の役割を担っていくということは、その暴力的な側面が表面化・先鋭化することでもある。こうした一面にアプローチするための歴史的・文化的研究を充実させていただければ、と希望する。さらに、軍隊の文化人類学的研究においては、災害救援活動、軍事訓練、企業等の体験入隊など、参与観察にもとづく多面的なフィールド展開も求められよう。

自衛隊に関する論考の中には、調査時期に偏りがあり、近年の安全保障環境の急激な変化に必ずしも対応できていない記述が散見された。10年から20年前の調査結果にもとづく現状分析に現実からの乖離を感じる部分もあったが、逆にいえば、この10年の日本社会の変化がいかに大きかったかということでもある。

また、本書において沖縄を直接に扱った論考が少ない点（第4章と第5章のみ）も惜しまれた。在日米軍についても、第15章のエイムズ論文が扱っているのみであり、沖縄や日本「本土」における米軍のプレゼンスがもたらす諸問題に対して、実際のフィールド調査に即してアプローチする研究があれば、より充実した内容になったのではないだろうか。

本書に収められた研究を通して、私たちは、軍隊という「他者」が異文化でもあり、自文化でもあることに気づかされる。田中が序章で述べている「縮図モデル」と「特殊モデル」という対比的な軍隊の見方と重なるであろうが、軍隊社会や軍隊文化はあくまでもそれを必要とする当該の実社会のエッセンスである。軍隊の文化人類学的研究の要諦とは、まさに「彼ら」について知ることを通して、「私たち」について知ることにあるのだろう。